

「礼文島国際フィールドスクール」参加報告 その1

Baikal Hokkaido Archaeological Project 夏季フィールドスクール

礼文島 浜中2遺跡 発掘調査(5th Season)

日時： 平成27年8月16日(日)～20日(木)

飛び交う言葉は英語。国際共同調査に、10名の関高生が参加しました。

- 調査には考古学だけでなく、人類学、動物学、環境科学、文献史学などさまざまな分野の研究者たちが参加しました。
- 浜中2遺跡は、海岸近くの砂丘にあり、厚い堆積層には縄文時代以降さまざまな時代の人類が活動した痕跡が残されています。土器や石器だけでなく、海獣類やイヌの骨、骨角器などが出土しています。
- 今年は雨天が続き、現場での発掘作業の時間はあまりとれませんでした。そのかわりに、ラボ(出土資料を整理する場所)にて、ドイツ、カナダ、アメリカ、日本など各国の研究者からレクチャーを受けることができました。もちろん講義は全て英語です。聞きなれない専門用語、難しい内容が、やや早口で発表されます。集中していないとついていけなくなってしまいます。



北海道大学の加藤博文教授(考古学)から、浜中2遺跡について説明を受けました。



遺跡周辺のトレッキングを行いました。緩やかな山には、荒涼とした笹地が広がっていました。



礼文島西岸の澄海岬(すかいみさき)。



町立郷土資料館にて浜中2遺跡の特別展示を見学。



植物の移り変わりから礼文島の環境を語る北大のステファニー先生。



わからなかった内容は、発表者に尋ねました。



一語でも多く聞き取りたい。集中して聴講しないと話がわからなくなります。



慶應義塾大学の佐藤教授に、オホーツク文化期の動物骨や骨角器について説明を受けました。



発掘現場での作業は最終日の午前中のみとなりました。明るい色の砂を除くと、黒い色のアイヌ文化期の包含層が表れます。



掘りあげた土はフルイにかけて、遺物が含まれていないか確認します。

「礼文島国際フィールドスクール」参加報告 その2

Baikal Hokkaido Archaeological Project 夏季フィールドスクール
礼文島 浜中2遺跡 発掘調査(5th Season)
日時: 平成27年8月16日(日)~20日(木)

調査に参加して得た貴重な体験や成果を、一人ひとりがレポートにまとめました。

＜英語を通じたコミュニケーションについて＞

- 現地では至るところから英語が聞こえてきて、まるで外国にぼつんと一人居るような感覚に囚われました。ラボで受けた数々の講義でも「ああ、今英語がわかっているならば、この時間はとても楽しくて面白いんだろうな」とどうしようもない後悔の念に駆られました。

自分が話した英語は自己紹介を除くとほんのわずかなものでした。しかし、最終日、現場で土をフルイにかける順番待ちをしている時に極東連邦大学からみえたロシア人女性に、意を決して「疲れませんか？」と話しかけることが出来ました。その程度ではありますが、私にとって大きな自信となる一歩を踏み出せた気がします。(1年 樋口真由)

- 英語でのコミュニケーション、今の自分はまだまだ力不足だと思いました。英語による講義を実際に聴いてみると、とても早くて話についていくのに精一杯でした。それ以上の事を考える余裕はありませんでした。

今後、自分は英語の力を磨いていきたいと思います。今回の活動で、自分の実力を知ることができました。自分の英語を使えるものにできるよう頑張っていきたいと思います。

(1年 下條優季)

- ラボでの休憩時間に、作業をしている人に話しかけることができました。相手の言葉は速く、主語述語といったような文法は完璧な文ではありませんでした。外国の方が実際に使っている文の構成を知る事が出来ました。話しかけた方の作業を少し体験させてもらう事もでき、良かったです。そしてなにより、自分の言葉が通じた事がとても嬉しかったです。(1年 小瀬木仁美)

- 大学の先生方や大学院生などの研究者による、全て英語の講義を1日聴くという機会がありましたが、すべての講義で2~3割程度しか聞き取れず、話すスピードが速い先生に至っては全く聞き取れないこともありました。

その原因として、英単語の意味を思い出すのに気がとられ、話を聞き逃してしまうということに気づきました。そこで、わからない単語はとりあえずメモを取り、後で確認するという解決策を考えました。翌日の講義でそれを実践したところ、前日より聞き取れているという実感がありました。自分で原因と解決策を考え、行った工夫が、聞き取れた要因になったことは本当に嬉しかったです。それでも、細かい内容は聞き取れず、リスニング力が足りていないなと強く感じたの



ラボでの作業について尋ねてみました。細かな作業が行われていました。

で、英語の授業に熱意を持って取り組みたいと思います。

私は外国の方に英語で自分から質問することができました。相手の方が私の話す英語を理解しようと、目を見ながら真剣に聞いてくださり、英語でコミュニケーションをとることができました。

聞こうという意思表示は言語が違って伝わるとは、コミュニケーションにはいろんな形があるのだと学びました。英語で言いたいことを伝えるのは本当に難しかったけれど、自分の言葉が通じると分かったときは感動しました。もっともっと勉強を重ねていきたいです！（2年 吉田菜由）



英語で関市の紹介をしました。日本文化に関わる話題には参加者の反応がよく、日本に対する関心の高さを感じました。

<研究者の姿に学んだこと>

■ **発掘現場やラボでは緊張感が感じられました。**それと同時に研究者のみなさんのいきいきとした姿も見ることができました。文系理系、専門分野、国籍を超えて楽しそうに話している姿は憧れそのものでした。**自分の専門分野に自信を持ち私たちに教えて下さる姿や、レクチャーをする姿は本当にかっこよかったです。特に印象に残ったのは、教授も学生も、年齢関係なく専門家同士で教えあっている場面です。**発掘でもそうですが、研究も一人ではできないのだと、当たり前なのに気付かされました。

研究者というと、一日中部屋に閉じこもっているような暗いイメージがありましたが、実際は仲間とコミュニケーションをとり、教えあっているのだと分かり、イメージが大きく変わりました。楽しそうに仕事をなさっている姿を見ると、自分の興味のある仕事ができるということはすごく幸せだろうと思ったし、興味のある分野を見つけることはとても大切であるとも思え、自分が興味のある分野を探したいと強く思いました。いつか私も、自分の仕事に誇りを持てるようになりたいです。また、考古学者になることだけが、考古学に関わるための道ではないことが分かりました。考古学には興味があるので、そのことを頭において自分の道を考えていきたいです。（2年 鵜飼真生子）

<調査を通じて学んだこと>

■ 不幸にも悪天候に見舞われ、発掘を体験できたのは最終日の午前中だけでしたが、その分レッキングで島内の自然景観を見たり、多くの著名な先生方の興味深い講義を受けるなど貴重な体験をすることができました。私は、これまで出土物を見る際には、それらの形状や材質ばかりに関心を向けていました。しかし、慶應義塾大学院生の平澤さんによる石器の講義で、**石器は形状と材質だけでなく、出土した状況や段階を把握することにより、その用途や当時の生活について深く考察できるという話を聞きました。**これは他の出土物にも言えることなのでしょう。実際に浜中 2 遺跡の発掘現場では、層やグリッドが細分され、多くの遺物はトータルステーションという機器によって出土場所が 3 次元で測量されてから取りあげられており、出土した状況などが正確に把握できるようになっていた。

また、同大学の佐藤教授からは、**石器や土器などの物理的要素(ハードウェア)だけでなく、当時の人々が持っていた固有の知識(ローカルナレッジ)から生活が成り立っていたということ**を学びました。知識という形として残らないものも勘案して当時の生活を解明していかなければならないことにむずかしさを感じました。

この国際共同研究は、文系理系を問わず様々な学問の研究者が一堂に会して行われる文理融合型学術研究といわれるもので、考古学だけでなく人類学、歴史学、動物学、地学などの多様な分野から、当時の生活についてアプローチされていました。私は考古学が文系なのか理系なのか以前より気になっていましたが、今回の調査を通してそのような枠組みがいかに無意味であるか痛感させられました。成果を出すまでのアプローチが違うだけで、誰もが同じ大きな目的に向かっているのです。今後自分も自分の得意な分野でこのような壮大な研究に携わることが出来たらよいと思っています。(2年 早川瑞記)

- **同じ行程を経験しても、自身の意欲次第でそこから得られるものは変わってくるのだとわかりました。**研究者の方々の話はとても難しく、周囲は自分よりはるかに賢く権威のある方々ばかりで、萎縮してもしきれないほどです。緊張するのは当たり前のことかもしれませんが、しかし、緊張することを言い訳にして、得られる情報だけでやっていけるほど私は賢くありません。元々の知識が周囲の人々より圧倒的に少ないのだから、聞かなければわかりません。勉強をするうえで、積極的に意欲的に取り組むことの重要性は学校生活でも同じだと思います。わからないことを素直に認めて、質問をし、理解を深める。苦手だと思う分野、わからなくて困っていることはどんな場面でもできます。そんなとき恥など気にせず、自分から学ぼうとすればよりたくさんの知識に出会えるのだと学びました。(1年 古田翔子)



北大の箕島先生の講義は、源氏物語などから北方民族との交易を読み解く驚きの内容でした。慶應の佐藤先生にも参加いただき、学際的な議論が行われるのを目の当たりにしました。

<自分の将来について考えたこと>

- 今後は2つの事を頑張りたいと思います。まず、今回は色々と気が回らなかったところがあったので、気を配れるようになりたいです。2つ目は、もっと英語を勉強したいです。礼文島にいた間の講義はとても興味深く、もっとしっかり聞くことができればと思いました。質問したくても英語で言えなくて諦めてしまったり、全く英語を聞きとれなかったりといったところがあったので、完璧とは言わないまでも、あらずじだけでも聞き取れるようになりたいです。(1年 間宮壮太)
- 今までは間違えるのが怖くて、質問することができませんでした。しかし、今回の国際フィールドスクールでは、分からないところを質問することができました。それをいろいろなところにかきたいと思います。わからない単語にこだわらずわかる英語をできるだけ拾うという、**英語のききかたを学んだのでそれもかきたいです。**しかし、英語を話すことはまだできていないので、それを直したいと思います。(1年 高井朗)
- 現地でレクチャーをされた方は、日本人でも英語で自分の研究成果を話されていました。**英語も勉強し、自分の専門分野も勉強するというのは、たやすいことではなく、相当な努力が必要だと思います。**そのような努力の結果が今回話された先生方の姿だというならば、僕ももっと頑張らなければいけないと感じました。今回の調査を通して、僕は、もっと英語を学ばなければならぬと痛感しました。これからは、英語の日常会話ぐらいは出来るように授業でも家でも勉強の仕方を工夫していきたいと思いました。また、今回の経験をもとに、これからも考古学について学んでいきたいです。(1年 高井秀樹)